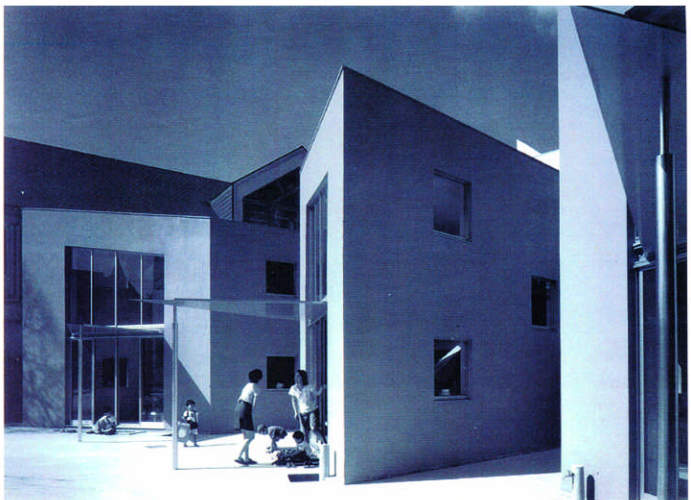
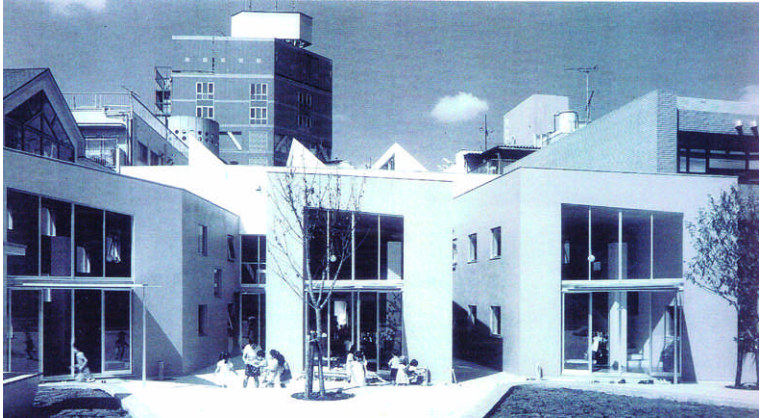




2階に設置する自転車駐留と右左のパーキング。真には通用口、左手に海軍専用スロープ出入口および各クラスのガーデンテラスへと続く。同時に紫色の扉など美術の造詣に準って仕上げられるアクセスとした出入口とランドスケープデザイン。既存の土の壁に対して今回デザインした黄色の水飲み場を置いた芝生の庭、石の庭（洗い出しの扉）、木の庭と、異なる素材で空間に響かざるがままな表現も練達した



3つのクラスルーム（園芸出入口）。心癒すような光にまつまわれて美談の1日が始まる。洗い出しの扉は建築的要素に始められた自然の高麗性を脱し出展——砂浜が通る空浮したままの光景のように

## 「オブジェ=フォルム」の意図的アッサンブラージュ アンリ・ゲイダン+金子文子

はじめに子供ありき。  
ここで私たちが最も心をかけたのは、限りなく自由な「空間=エスパス」を構築すること。そのためには敢えてひとつひとつがはっきりとした個性を持つフォルムを形成した。その上で玩具箱から取り出したレゴブロックのように、ひとつひとつを組み合わせる。「オブジェでもフォルム」がはっきりと鮮明に、もうひとつの「オブジェでもあるフォルム」に邂逅する。独自性を主張するさまざまなムーブメントで連結されて構築され、それがひとつの大きな「空間=エスパス」=風景を構成していく。ひとつひとつの「オブジェ、あるいはフォルム」は、固有の人物の顔のごとく、それぞれ鮮明な個性をアピールする色彩を持たせる。  
そしてその間に浮遊する「ひかり=コミュニケーション」、その存在の重要性。  
これらの「意図的アッサンブラージュ」が錯綜する不思議な調和を生みだし、これが形

成する風景。「空間=エスパス」には定義された方向性は存在しない。あらゆる角度に発散され拡散される閉鎖性のない空間は永遠性を示唆する。心理的に完璧なる自由さにみちた建築的仕掛け。  
採光の陰影や、自然と一体化した建築空間のなかで過ごす日々のくらしから、子供たちははたかさんのことを感知し学んでいく。それぞれの発達に逸出した知的好奇心を満たす驚きにみちた「オブジェ、あるいはフォルム」の創りあげる隠された空間=風景が、至るところにまちまちはまっている。  
子供たちの歓声が高い天窓にひびきわたる。何人かは多目的ホールの片側を占める半円の緑のヴォリュームに沿ってグルリと半周する。あるものは天井からそのまま柱となり小さなベンチで終了する黄色のヴォリュームの陰に身を隠して声も立てずに笑っている。もうひとりはその小さなベンチに腰掛けている。

3つのクラスは板灰色、黄、黄色の色彩で区別し、あたかも独立した小さな家と見えた。それぞれメゾネットを持たせ、2階の緩やかな弧を描く回廊へとつながっている。クラスの間は洗い出しの中庭。  
中庭をとおして視覚的な連続性を保つことで3つのクラスの心地よく劇的な関係が生み出される。  
浜辺の景観、なぎさの水辺をイメージしたひろびろとした園庭は目の前に広がる。それぞれ中央には花の樹木が1本。その下で野外劇場にもなる洗い出しの石の庭。湾曲した入江の海岸線のような形状でつらなる緑石の上を、さっそく形に沿って波間の小さな貝殻のようにたどっていく子供たち。まるで空間をいかようにも遊ぶ魔術師のごとく。  
「意図的アッサンブラージュ」の空間を、軽やかな身の廻し方で漂う子供たちの存在が建築の光景を何倍にも生き生きと際立たせていく。  
Henri Guyden + 金子文子